“号外,,パート11　平成24年12月11日　発行所:四国時報

露見!!四国時報に次々と暴かれる偽情報提供者たち
似非サムライ・川上道大・刀折れ矢尽きたか？

〒768-0011
観音寺市出作町 603 番地 3
電話　0875-25-6883
編集発行人　木下俊明

読者の方々から「号外」は、ゴロ付新聞・四国タイムズに反撃するのが痛快で、面白いので欠号しないでとの声が多数あります。被告川上は出鱈目な作文や、いい加減なガセネタを報じ、又、裁判所からも主張の信憑性に欠けると指摘されるも、決め手となる証拠が皆無なのに焦り、必死になって狂ったように走り回っておるようだ。元々、思いつき的な報道から始まる一連の記事での主張や、表現はコロコロと変わり、世の中の悪事といわれる全てに原告が関わっておるがごときに次々と「無理矢理」組立てた荒唐無稽な内容に賢明な世間の人達から嘲笑されている。被告川上は己の無茶苦茶な妄言や暴言に反論されると「やれ脅しか」などと自分勝手でお粗末な奴だ。さて、２ヵ月ぶりに四国タイムズの記事である。息切れ・ネタ切れしたのか毎号を発行できる内容に困った感のあった被告川上に絶好の口実を与えたのが今月号の記事だ。**この読者とは、観音寺市在住の十鳥晴美氏だ。**ここで原告と「トラブル」になっていると被告川上がいう十鳥晴美氏について少々話そう。十鳥氏とは数年前、カラオケ店で先方から「自分は**大阪の人**と遠戚になります」と近寄られたのが最初で、以後、幾度かカラオケ店で出会う度、普通の会話をする程度でした。そんなある日、一度ゆっくり会って色々話そうと約束をしたのですが、十鳥氏は、その約束をいとも簡単に破るという世間大人の信義に欠ける行為があり、以来、十鳥氏は原告に顔を合わせにくくなったようです。この事を被告川上は大袈裟に、さもトラブっている等と川上流の表現で記事化している。いずれにせよ、十鳥氏へ原告が届けた「四国時報号外」を予想通りうろたえて渡すとか、原告とトラブルがあったとか、被告川上と接触している事実から、十鳥氏は被告川上サイドの立位置にあると認識しています。物事はいつか露見するもので、原告行きつけのカラオケ店に被告川上の四国タイムズが送り付けられ始めた夏頃、誰がそうさせたのかと推測していたが、やはり予想は見事適中した。十鳥氏には失礼だが、原告は十鳥氏等には何の関心も存在すらも感じていないし、どう思われようと勝手です。十鳥氏の人物評も、これまた奇々怪々、様々な噂があるが、原告の事実でない陰口や、カラオケ店内でヤクザの仁義を切るパフォーマンスをした等と偽情報を流すのであれば、その行為発言に責任を持ってもらわなければならない。今回、原告のネタ集めに狂奔中の被告川上にとって、ネタ切れに最適と原告の投げ餌(十鳥への「号外」届け)に予想通り喰らいついた。この一点からも被告川上に観音寺市周辺で、M氏・N嬢やU氏・O氏等と接触し情報収集するよう指令して**繋いだ人物**が推定できる。被告川上が原告を終始一貫して「六代目山口組倭和会の企業舎弟」だと決め付ける証拠は、誰がどのように偽証しても、決して立証することはできない。つまり、企業舎弟でもないし、ネズミ講等、刑法に触れる事実がない事実だ。又、被告川上は己の**尊敬する人物**を結果的に世間評を貶めることになる記事を軽薄に報じている。原告を「裏切り者」扱いする報道も行った。

裏面へ

ここで、太田出版から発売の宮崎学著書「六代目山口組司忍組長と小泉純一郎首相にケンカを学ぶ」から引用させてもらい記す。(133 ページ途中より抜粋文)「一方ヤクザは裏切られることに慣れてもいる。幸せな家庭で育ったヤクザなどほとんどいないもので、そもそも生まれた時からずっと、裏切られ続けているのがヤクザというものだ。だから市民社会で起こる裏切り、例えばヘタレな恋愛で彼氏・彼女に裏切られただの、家族や会社の人間に裏切られただのといったことで、へこたれたりしない。烈火のごとく怒り、そして、ただひたすら報復を考えるだけである。うじうじ悩んだりしないものだ。ヤクザは人を裏切るものだということを知っている。だからこそ簡単に人を信頼しない。あの人が私を裏切ったなどという泣き言は、そのまま自らの恥となることも知っているわけだ。･･･」又、(134 ページ中)「自分の周りにどれだけ自分を裏切らない人間がいるのか。試しに数えてみれば誰しも愕然とするものだろう。･･･」被告川上は、よくよく「熟読玩味」することだ!!元より原告は、裏切ったりしていないし、そういわれる筋合いもないことは明白だ。被告川上自身は、暴言・妄言・放言の限りをしておきながら、正当に反論・反撃・抗議を受けるや「やれ脅しか」等と憶面もなく報じる最低な奴である。毎号に県の前･現知事が逮捕されるとか放言し放題で実現しない以前にも記したが、奴は狼オッサン(少年)の似類人種だ。抗議や反撃されて怖がるのは、己にやましい気持ちや後ろめたい気持ちがあるからだ。偽情報提供者達は「どうしよう…どうしよう」と脅えるのなら発言には留意すべきである。「男は一歩家を出ると 7 人の敵が居る」との諺があるが、少なくとも、被告川上、十鳥はその内に数えられるが目に見えるだけに対しやすい。幕末新撰組副長・土方歳三をラストサムライといわれて誰もが認めるが、自称してはばからぬ厚顔な被告川上がラストサムライ等とは笑止千万だ。茶化されて、四国時報に刀を振りかざしたものの、逆にへし折られて今や「さや侍」である。又、どこまでがどこまでやら武道家でもあるという。自分で言うのは勝手だが所詮はただのゴロ付。毎号同じ内容の記事をバックナンバーから掘り出して繰り返すしかネタが無いのだろう。又、襲撃事件を毎号に記すのは、極度に脅え(ガク震＝ガクブルとも言う)牽制している心理が表れており、原告がその事をズバリ指摘すると、これを脅しだ等と感じる風を装っている。卑怯な輩である。本号外第 1 号で即指摘した通り、被告川上の動機から必死になって、原告の四国時報潰しを目論んで、大嘘八百な捏造記事をただ**「倭和会」を一途に恨む人物**との共謀とも言えるような創作をして攻撃したものの、結果はその企みとは裏腹に益々、原告と四国時報の知名度を高めることになったのは、何とも皮肉なことである。四国時報に対する被告川上の報道は、**誰か別人**の代理・代弁を窺わせる内容であることは、読者の皆様もお気付きのことでしょう。それと、せっかく原告の顔写真を掲載するなら直近の姿を撮りにいらっしゃい!!入手先見え見えのいつもの写真は古いので。原告以外に悪質報道を受けている前・現知事とか企業人は何故、反論・反撃しないのか不思議で理解できない。事実で反論できないのか？相手にせず無視なのか？ある人は弁護士に相談したら「相手にしない方がいいですよ」と言われたとか。だからといって放置しておけば被告川上のような輩は図に乗るのです。原告を参考にされて多くの被害者が一斉に訴訟を起こせばいいのです。被害者団の結成も考慮して呼びかけを検討し始めます。被害者の方は至急ご連絡下さい!!お待ちしております。